大人が絵本を

第100回 絵本は

司書・読書アドバイザー　安藤　宣子※
小児歯科医師　濱野　良彦※※
※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ（福岡市）
※※ 医療法人元気が湧く　理事ファウンダー

「ホスピタリティの宝箱」ってなあに？

「大人が絵本を手にするときは！」100回までお付き合いくださった大人のみなさま、ありがとうございます。連載第100回は、私たち“医療法人元気が湧く”が取り組んでいる「ホスピタリティの宝箱」のお話をいたします。

“医療法人元気が湧く”は、福岡市とその近郊で、小児歯科３院を経営しています。３つの小児歯科医院では患者さま一人ひとりに対して、カルテとは別の記録様式があります。それには、お子さまが希望する呼称であったり、習いごとやマイブームであったりと、口腔内データとはまったく別の個人情報が記載されています。この記録様式が、「ホスピタリティの宝箱」なのです。

略称「ホスピの宝箱」は、診療中のコミュニケーションを円滑にし、患者さま親子との距離を縮めるものとして、カルテと同様に大切な診療情報です。小児歯科医師、歯科衛生士、受付保育士だけでなく、ときには司書がキャッチした情報も「ホスピの宝箱」に書き込みます。これをコ・メディカルスタッフで共有して、診療を行っているのです。

小児歯科を生業とする“医療法人元気が湧く”に、“絵本と図鑑の親子ライブラリー”が加わって10年、コ・メディカルスタッフに司書が加わって10年、患者さまの信頼をより一層高めながら、チームで小児歯科医療に携わっています。

昨年2022年は、絵本と図鑑の親子ライブラリー創立10周年のアニバーサリーイヤーを迎えることができました。本誌読者のみなさまのお力添えも大きな力となっています。この場をお借りして御礼申し上げます。

祝！「絵本の日」創設10周年

10周年の節目を迎えたのは“絵本と図鑑の親子ライブラリー”ばかりではありません。ビブリオキッズの愛称で親しまれている図書館の創立と同じ年に、日本記念日協会に登録して創設した「絵本の日」も、昨年、10周年の節目を通過することができました。このダブル10周年を記念して、“医療法人元気が湧く”は、元気が湧く書籍を出版したのです。書名は、『絵本はホスピタリティの宝箱』。

『絵本はホスピタリティの宝箱：エピソード33』
医療法人元気が湧く 編
田之上尚子 イラスト
（かもがわ出版）

親になってから思い出すあの頃のこと、甘酸っぱい記憶、祖父母の匂い、楽しいだけではない子育てのこと……そんな「絵本にまつわるエピソード」の公募をはじめたのは、「絵本の日」創設５年目の2017年です。「絵本の日アワード in FUKUOKA　エピソード部門」と命名されてからこの６年の間に、北は北海道から、南は沖縄まで全国各地からさまざまなエピソードが寄せられました。

第１回から５回までの５年間で、実に1,307作の応募がありました。そのうち、賞を授与するのは毎年５作品で、社会とシェアされるのは、この５年間の応募総数のわずか２％だけなのです。個人の大切な想い出をお預かりしながら、胸を打つ作品を広くシェアできない現実に、「知識や情報の伝播を円滑にするコミュニケーションの媒介機関」である図書館の司書という専門的立場から、どこか心に引っかかるものがありました。

そこでビブリオキッズ創立10周年、「絵本の日」創

手にするときは！
ホスピタリティの宝箱

企画　濱野　良彦
構成　木須　信生※※※
※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ（福岡市）

設10周年を機に、これらの作品にもう一度光を当て、人々の心を揺さぶる「絵本にまつわるエピソード」30編をまとめたのが、『絵本はホスピタリティの宝箱』です。絵本という文化財と、個々人の人生が織りなして生まれた「ホスピタリティの宝箱」というわけです。私たち法人の小児歯科医療事業と、社会文化事業が集結された珠玉の一冊なのです。

そして、「大人が絵本を手にするときは！」の答えを暗示する30例でもあります。

このすばらしきツール「絵本」

『絵本はホスピタリティの宝箱』のトップバッターとなったエピソードの執筆者は、「絵本の日アワード in FUKUOKA」栄えある第１回のグランプリを受賞された熊本県の田邊雅彦様です。『しろいうさぎとくろいうさぎ』でグランプリを受賞した翌年の第２回では、『せんたくかあちゃん』によるエピソードを応募されたのです。

『しろいうさぎとくろいうさぎ』
ガース・ウィリアムズ 文・絵
まつおか きょうこ 訳
（福音館書店）

『絵本はホスピタリティの宝箱』の書名にこめた願いがストレートに表現され、トップを飾るにふさわしい作品だと思っています。勢いがあって、しかし、やさしさや思いやりが内包されたエピソードは、次の作品への読者の期待値を高めるものでもあります。

では特別に、「小児歯科臨床」誌をご購読のみなさま方に、『絵本はホスピタリティの宝箱』最初の作品『せんたくかあちゃん』をご覧いただきましょう。

『絵本はホスピタリティの宝箱』
作品『せんたくかあちゃん』
さとうわきこ 作・絵　福音館書店
執筆者　田邊雅彦 様（熊本県）

「あの本を送ってくれない？」と娘から連絡が来ました。孫も大きくなってきたし、あの本かとピンと来ました。『せんたくかあちゃん』です。

せんたくかあちゃんは、ボサボサの髪、腕まくりした太い二の腕、太い腰にエプロンをして、大地を踏みしめる太い足には木の底のサンダル（つっかけ）を履き、大きな木のタライと洗濯板で洗濯をします。

美魔女の対義語は、せんたくかあちゃんだと思います。

洗濯好きのかあちゃんは、家の洗濯物だけでは飽き足らず、洗濯ロープを森の中まで張り巡らせ、逃げる犬猫子供、傘や靴、果てはヘソを盗ろうとして落ちて来たカミナリ様まで洗い、洗いすぎて消えてしまったカミナリ様の顔は、子供達が可愛く書き直します。

木のタライと洗濯板は説明がいるようになりましたが、絵本の最後に「きのうみたいに　いっちょやってくれえ」と地を覆うばかりに空から降って来る大勢のカミナリ様に向かい、「よしきた、まかしときい」と胸を張る姿は、これからの時代も説明のいらない、母親の心意気を感じさせます。

我が家の３人の子供達は、上下８歳の歳の差がありますが、全員一致でリクエストするのは、この絵本でした。そのため、色褪せ、表紙裏には意味不明な落書きまであります。さすがに、これでは孫が大きくなるまで持たないだろうと、新しいものを買い求めました。

『せんたくかあちゃん』
さとうわきこ 作・絵
（福音館書店）

真新しい表紙を見て懐かしく、読み返すと、昔通り面白く爽快感もあるのですが、何かが違います。当時感じていた、あの幸せな温もりがないのです。それは子供達の笑い声によって、もたらされていたものだったのです。

私にとっての絵本とは、子供に読み聞かせた時に生まれる屈託のない笑いや、もらい泣きしてしまう涙や、純粋な怒りを子供達と分かち合うものなのです。

いつもの時間に、いつもの布団に入って、いつもの絵本で、いつもの所での笑い声は、私たち家族の深い所でいつまでも響いています。

輝きを放つ、絵本にまつわるエピソード

『絵本はホスピタリティの宝箱』は、株式会社かもがわ出版より出版されました。本社は京都ですが、今回、編集をご担当いただいたのは東京事務所の天野みか氏です。最初にエピソード原稿を入稿したとき、天野氏は『せんたくかあちゃん』の執筆者を女性（祖母）と解釈したのです。最初の原稿では、執筆者の氏名をふせ、イニシャルで表記していたからです。確かに、本文だけを読むと女性の作品とも受け止められます。

『せんたくかあちゃん』のエピソードを、父親の立場、そして祖父の立場で書き記していることこそ、この作品に重みをもたせ、深い家族愛が宿っている理由だと思うのです。それは、妻への感謝と、母親となった娘さんへのエールがみえるからです。何より、ご自身が家族の中心にいたころの幸せな気もちを大切にしている男性の姿を、社会とシェアしたいという思いに突き動かされるのです。

日本ホスピタリティ推進協会によると、「ホスピタリティとは接客・接遇の場面だけで発揮されるものではなく、人と人、人とモノ、人と社会、人と自然などの関りにおいて具現化されるものである」とし、狭義では「主客の両方がお互いに満足し、それによって信頼関係を強め、共に価値を高めていく『共創』がホスピタリティにおける重要なキーワード」と定義しています[1)]。エピソード『せんたくかあちゃん』は、この定義をものの見事に表しているのです。だから、ホスピタリティの詰まった「お宝」なのです。

編集者の眼

出版までの最初の作業は、「絵本の日アワード in FUKUOKA　エピソード部門」に５年間で応募された1,307作品を司書２人で読み返し、社会とシェアしたい50作を厳選しました。その50作品を、かもがわ出版の天野氏が今度は編集者の眼で30作品に絞り込んだのです。

天野氏は30選に絞るに当たり、似たようなシチュエーションや境遇が重ならないようにしたと言います。つまり、受賞作品であるかどうかに関係なく、人々の心を揺さぶる30通りの「絵本にまつわるエピソード」の傑作集なのです。

過去の受賞作品は、私たちにとっても思い入れが強く、どうしてもアドバンテージを持たせている感があります。編集者・天野みか氏の公正公平な視点で選んだ30作は、バイアスのない、真実のホスピタリティが備わっているのです。裏を返せば、私たち司書の「推し」が未掲載となった場合もあるというわけです。厳正に選ばれた「絵本にまつわるエピソード」30編ということがおわかりでしょう。

ここまでお話をしてきて、『絵本はホスピタリティの宝箱』のサブタイトルと作品数が合わないなあと不思議に思われている読者の方へ、その謎を解決い

ビブリオベイビー Bibli Baby

連絡先　福岡市南区大橋 3-2-1 2F
絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ
TEL 092-557-3272　URL http://bibliokids.jp

E-mail
安藤：bibliokids.baby1@gmail.com
濱野：hamano@genkigawaku.com
木須：nobuokisu@gmail.com

たしましょう。サブタイトルは「エピソード33」となっているのに、30編とばかり強調してきました。「絵本の日アワード in FUKUOKA」に応募された作品から厳選したエピソードが30編で、このたびの書籍化に当たって、３名の著名人に特別寄稿エッセイをご執筆いただいたのです。30編プラス３編ということで、「エピソード33」なのです。

その３名とは、俳優で人権活動家のサヘル・ローズ氏、芸人でマンガ家の矢部太郎氏、そして歌手で上々颱風のメンバー・白崎映美氏です。矢部氏の「絵本にまつわる“コミックエッセイ”」も見どころのひとつとなっています。

人生の原点は、絵本

「絵本の日アワード」に応募されたエピソードのうち、いつも際立った力を放つものとして、個人的に注目している要素があります。それは、子どもたちが自ら、絵本をプレパレーションツールとして活用していることです。『絵本はホスピタリティの宝箱』に登場する子どもたちは医療者に導かれずとも、自らの心の準備や、気もちを落ち着かせるために、自ずと絵本に向かっているのです。もちろん、本人にはそのような意識はありません。いつも身近な絵本を、いつものように楽しむことで、子どもたちがセルフコントロールしている姿がみられるのです。

『フェリックスの手紙』のけーしま様（PN）は、３歳で小児がんを発症し、お友だちが幼稚園で遊んでいる発達期を病院で過ごした幼少時代を持ちます。入院・闘病生活では『フェリックスの手紙』をお母さまと毎日読みあったことで、広い世界を見る体験ができたと振り返っています。そして、大人になったけーしま様が旅人になった原点が、この絵本の主人公・フェリックスだと結んでいるのです。「ホスピタリティの宝物」です。

『フェリックスの手紙』
アネッテ・ランゲン 作
コンスタンツ・ドローブ 絵
栗栖カイ 訳
（ブロンズ新社）

絵本はホスピテリティの宝箱

本連載64回で紹介したエピソード『ふしぎなおきゃく』もエピソード33に選ばれました。四国は高知県で、子ども自らが医療に絵本を取り入れた体験談です。病院で、検査や診察待ちの間のドキドキするする気もちが、絵本を読むとホッとすると話した棚橋すみえ様のお嬢さまは、自分が味わった小さな「安心」を、同じ境遇にいる会ったことのないお友だちと分かち合おうとしたのです。相対して分かち合うことはないけれど、手を差し伸べ、気もちを届けたのです。

『ふしぎなおきゃく』
肥田美代子 作
岡本颯子 絵
（ひさかたチャイルド）

絵本がそこにあることで、絵本とともに暮らしていることで、介在者がいなくても子ども自身が絵本に助けられている姿がそこここにあるのです。つまりは、子どもと大人の生活圏に絵本のある環境が整っていれば、人と絵本が出会うだけで絵本は何がしかの力を発揮してくれるのです。そこに、専門職が介在すると、効果はより高くなるというわけです。

絵本は、ホスピタリティの宝箱です。

文献
1）日本ホスピタリティ推進協会：ホスピタリティとは，日本ホスピタリティ推進協会HP https://hospitality-jhma.org.